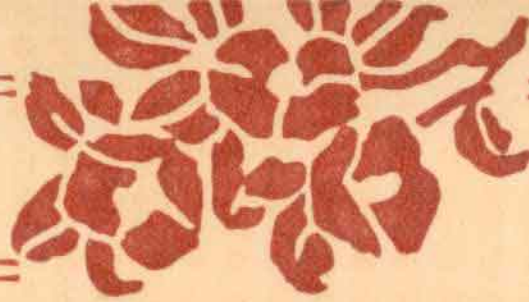




角川文庫

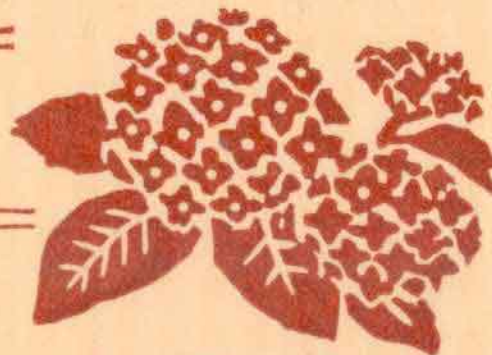
— 466 —

新 版

伊 勢 物 語

付 現代語訳

石田 穰二 訳注



角 川 書 店



昭和五十四年十一月三十日 初版発行

定価は、カバーに
明記してあります

角川文庫

新 版
い 勢 ものがたり
伊 勢 物語



訳注者

石田 穰二
いしだ じょうじ

発行者

角川 春樹
かくがわ はるき

印刷者

村沢 達弘
むらざわ だつひろ
東京都港区新橋四ノ三十ノ八

発行所

東京都千代田区富士見二ノ十三
郵便一〇二〇〇東京③一九五二〇八

株式会社 角川書店
かどがわしよてん
電話東京五七二二(大代表)

落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan 旭印刷・本間製本

0193-400501-0946(0)

新 版
伊 勢 物 語

付 現代語訳

石 田 穰 二 訳 注

凡 例

一 本書は、天福本系統の最善本である学習院大学蔵本（藤原定家自筆本を三条西実隆が臨写したものを底本として『伊勢物語』の読解を試みたものである。本文、脚注、補注、現代語訳から成り、終りに解説と、それを補う意味で、業平卒伝、略系図、略年譜を置いた。

一 本文の異同については、定家本の中で天福本に並ぶ有力な伝本である武田本を主に参照し、武田本に見られる本文の異同はすべて脚注あるいは補注に示した。

一 本文の表記は、読解の便宜を考慮して、以下の原則によって統一した。

仮名遣いは、歴史的仮名遣いに統一した。

「む」「ん」は、すべて「む」に統一した。

底本の仮名、漢字の表記は、適宜改めた。

句読点、濁点をほどこし、漢字には適宜振り仮名を付けた。

会話の部分に括弧「」を施した。

歌は、行を改めて二字下げとし、上句（五七五）と下句（七七）と二行に表記した。

作者の注記と認められる部分は、行を改めた。

底本には明らかな誤りと思われる箇所があるが、本文には手を加えず、黒点（・）を施し、脚注にその旨指摘した。

一 他の歌集（『業平集』関係を除く）に見られる歌、または類歌は、すべて脚注あるいは補注に示した。

一 現代語訳は、原文に忠実であるべく努め、原文にない語句を補う場合は括弧（ ）に入れて区別した。

一 解説は、この物語に対する校注者の関心を軸として、私見の若干を示した。

一 巻末に、和歌（初句・四句）索引と、語彙索引を付載した。

昭和五十四年六月

石田 穰二

目次

凡例

本文（現代語訳）

初 段	初 冠
第二段	西の京の女
第三段	ひじき藻
第四段	月やあらぬ
第五段	築地の崩れ
第六段	芥 河
第七段	いとどしく
第八段	浅間の嶽
第九段	東下り
第十段	たのむの雁
第十一段	空行く月
第十二段	武蔵野
第十三段	武蔵鑑
第十四段	姉齒の松

校本文

一五	一六	一六	一七	一八	一八	二〇	二〇	二二	二三	二四	二四	二五	二五
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

三

現代語訳

一五	一六	一六	一七	一八	一八	二〇	二〇	二二	二三	二四	二四	二五	二七〇
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----

第十五段	しのぶ山
第十六段	紀有常
第十七段	あだなりと
第十八段	くれなゐに
第十九段	天雲の
第二十段	かへでの紅葉
第二十一段	おのが世々
第二十二段	千夜を一夜に
第二十三段	筒井つの
第二十四段	あづさ弓
第二十五段	秋の野に
第二十六段	もろこし舟
第二十七段	水口に
第二十八段	あふごかたみ
第二十九段	花の賀
第三十段	玉の緒ばかり
第三十一段	よしや草葉よ
第三十二段	しづのをだまき
第三十三段	菟原の郡
第三十四段	言へばえに
第三十五段	洙緒によりて

三 三 四 四 四 四 五 五 六 六 七 八 八 九 十 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八

一八 一七 一七 一六 一六 一五 一五 一四 一四 一三 一三 一二 一七 一六 一五 一四 一三 一七 一七 一七 一七 一七 一七

一八八
一八九
一九〇
一九一
一九二
一九三
一九四
一九五
一九五
一九六
一九七
一九八
一九八
一九九
二〇〇
二〇〇
二〇一
二〇一
二〇一
二〇二
二〇三
二〇四

第五十七段
われから身をも

第五十八段 長岡

第五十九段 東山

第六十段 宇佐の使

第六十一段 染河

第六十二段
われにあふみ

第六十二段　つくも髪

第六十四段 玉すだれ

第六十五段 在原なりける男

第六十六段 難波津を

第六十七段 生駒の山

第六十八段 住吉の浜

第六十九段 狩の使

第七十段 大淀の渡り

第七十一段 神のいがき

第七十二段 大淀の松

第七十三段 月のうちの桂

第七十四段 岩根踏み

第七十五段
みるをあふにて

第七十六段 大原や小塩の山

第七十七段 安祥寺

五六

五六

五七

五八

五八

五九

和

六

六

六五

六五

六六

六六

六八

六九

六九

た

七五

せき

七

七

九〇	八九	八八	八七	八六	八六	八五	八五	八四	八四	八三	八一	八〇	七九	七八	七六	七五	七五	七四	七三
二四四	二四三	二四二	二四一	二四〇	二三九	二三九	二三八	二三八	二三七	二三六	二三四	二三三	二三三	二三一	二三〇	二二七	二二六	二二六	二二五

第九十九段

見ずもあらず

第 百 段

後涼殿のはさま

第百一段

あやしき藤の花

第百二段

雲には乗らぬ

第百三段

寝ぬる夜の

第百四段

世をうみの

第百五段

白露は

第百六段

龍田河の紅葉

第百七段

藤原の敏行

第百八段

とはに浪こす

第百九段

花よりも

第百十段

魂結び

第百十一段

まだ見ぬ人を

第百十二段

須磨の海人の

第百十三段

長からぬ

第百十四段

芹河の行幸

第百十五段

おきのゐて都島

第百十六段

小島のはまびさし

第百十七段

住吉の行幸

第百十八段

玉かづら

第百十九段

形見こそ

九〇

九一

九二

九三

九三

九四

九四

九四

九五

九五

九七

九七

九八

九八

九八

九九

九九

一〇〇

一〇〇

一〇一

一〇二

二四四

二四五

二四六

二四七

二四七

二四八

二四九

二四九

二五〇

二五〇

二五二

二五二

二五三

二五三

二五三

二五四

二五五

二五五

二五五

二五七

二五七

第百二十段	筑摩の祭	一〇二	二五八
第百二十一段	梅の花笠	一〇三	二五九
第百二十二段	井手の玉水	一〇三	二六〇
第百二十三段	深草の女	一〇四	二六〇
第百二十四段	思ふこと言はでぞ	一〇四	二六一
第百二十五段	つひに行く	一〇五	二六一
補注		一〇六	
解説		二六三	
業平卒伝		三〇五	
略系図		三〇六	
略年譜		三二〇	
和歌（初句・四句）索引		三七	
語彙索引		三三	

新版 伊勢物語

初段

むかし、男、初冠^一して、奈良の京^{きやう}、春日^{かすが}の里に、しるよしして、
 狩^四にいにけり。その里に、いとなまめいたる女はらから住みけり。
 この男、かいま見てけり。おもほえず、ふる里に、いと^七はしたなく
 てありければ、心地^{こころ}まどひにけり。男の着^はたりける狩衣^{かりぎぬ}の裾^{すそ}を切り
 て、歌を書きてやる。その男、信夫^{しんぶ}摺^{すり}の狩衣^{かりぎぬ}をなむ、着^はたりける。

春日^{かすが}野の若紫^{わかむらさき}のすりごろも

しのぶの乱れかぎり知られず

となむ、おいづきて言ひやりける。ついでおもしろきことともや思

ひけむ、

みちのくのしのぶもぢずり誰^{たれ}ゆゑに

乱れそめにしわれならなくに

といふ歌の心ばへなり。昔人^{しゆじん}は、かくいちはやきみやびをなむ、し
 ける。

一 元服して。元服は男子の成人式。叙爵とする説もあるが、「かうぶりす」の形の時は元服の意である。

二 平城京の東の郊外。ほほ、現在の奈良市の市街一帯にあたる。

三 「しる」は領有する。

四 鷹狩である。

五 たおやかな女の美しさを言うのが本来の用法であらう。〔補注一〕

六 「ふる里」は、昔住んでいた所。さびれた旧都の意。「ふる里」となり

にし奈良の都にも色は変らず花は咲きけり」〔古今集〕巻二春下、奈良の帝の御歌。

七 「はしたなし」は、中途半端、身の置き所がない、の意。

八 広本系諸本、塗籠本、ともに助詞「の」を欠く。

九 もと遊獵用の服装であったことからの名称。「狩にいにけり」と響き合っている。

一〇 陸奥、信夫（しのぶ）郡の名産であった。〔補注二〕

二〔補注三〕

三 天福本、武田本ともに「をいつきて」とある。「老（お）い付きて」の意。大人ぶって。

三三〔補注四〕

四 以下、この一段に対する作者自身による解説。